

田中優子

●泥（両泥）

「泥棒」の語源を調べると「押収坊（おしとりぼう）」など多くの推測に出会うものの、はっきりしない。この言葉は江戸時代から使われたと言われている。それ以前は、中国で盗賊を意味した白波賊から「白波（しらなみ）」と呼んでいたようだ。物を盗み取る行為全般を指しているので、盗人の総称と言えるだろう。この噺に登場する二人の泥棒は空き巣である。空き巣は留守中の家に侵入し、誰とも接触せずにその家の財産を盗む者またはその行為だ。首尾よく誰にも見つからないことが条件だが、もしも現場を見つかったら、傷害や殺人に至るだろう。その場合は呼び名も強盗に変化する。江戸時代では戸締りが疎かだった場合の減刑はあったようだが、土蔵などの錠を破ったら、窃盗でも死罪となった。盗みは、全ての犯罪への入り口だったからだ。

●大食い（そば清）

古くから「～比べ」と称して競い合い、それを周囲が面白がる風潮があった。特に江戸庶民は力士や長者の番付を好み、本も出版され人気を博した。そこで大食の番付もできた。暴飲暴食を奨励する医者はいない。消化器系の異常を招き病に繋がるからだが、幕臣であった宮崎成身の『視聴草（みききぐさ）』には、一八一七年（文化十四）に柳橋の茶屋「万八楼」で開催された大酒大食会の様子が榊原文翠の絵で残されている。飯連、鰻組、そば組、酒組等各組の高成績者と飲食量等も記録された。そば組ではこの噺の七〇杯に届かないが、池之端仲町の山口屋吉兵衛の六三盃がトップだった。飢饉が珍しくない時代だ。たらふく食べることが豊かさ、という価値観がまだまだ根付いていたのだろう。しかし、膨大なフードロスを引き起こしながら食糧危機が近づく現代では、厳に慎みたい。

● イカモノ（江島屋怪談・恨みの振袖）

この噺は怪談噺全十五席『鏡ヶ池操松影』の中の「江島屋騒動」である。一八六九年（明治二）に三遊亭圓朝が創作した。イカモノは「如何物」と表記する。まがい物、偽物、イカサマ物のことだ。転じて、イカサマ師、詐欺師、ペテン師とも解釈される。この噺のイカモノは、江島屋という古着屋の商品である婚礼衣装そのものと、それを承知の上で商売している経営者の両方を指している。この頃はまだ消費者庁も消費者センターもない時代なので、こういう確信犯的な犯罪は多かったに違いない。しかし商業が発展した江戸時代である。当初から井原西鶴は、タコの足を切って売り、あるいは使用済みの茶葉を売るなどの詐欺をした商人が、最後は狂い死ぬ話を書いた。商いと信頼こそが価値だ、と発信し続けたのである。今も全く同じである。騙された消費者の恨みは深い。

● 小咄と落語（駒長）

一七六八年（明和五）刊の噺本『軽口はるの山』に「筒もたせ」という小咄が収録されている。金に困って友達に相談すると、かみさんの器量が良いのだから若い者に色ごとを仕掛けさせ、お前は戸棚に隠れてそれ見つければ三百目にはなるよ、と言う。その通りにしたのだが、戸棚の中から出た途端に、「筒もたせみいつけた！」と言った、という話だ。無論計画はおじゃんだ。小咄が落語になる例は多いが、こんな話がこの複雑な落語にまで成長するには、長い曲折を経たであろう。登場人物は『大岡政談』の登場人物の名前を使ったので、実際に世間で起きている事件をさまざま参考にしたと思われる。そこから、女性がしたたかに生きる強さと悪知恵を作り出したのだろう。落語の話は社会の実像を反映しているからこそ、笑ったり怖がったりできるのである。

●江戸の大工（大工調べ）

江戸では、幕府の建設工事は作事奉行が受け持っていた。作事奉行の指示によって、その下の大工頭（代々世襲）が工事全体を統括した。同様に、大工頭の下の大棟梁（代々世襲）が設計面の管理や職人などの手配などを担当し、住んでいる地域の大工組に所属している大工・職人を動かした。各大工組は規約をつくり、親方が統括して所属する大工から経費を徴収していた。この嚙に登場する頭の政五郎は、親方の下に位置していたと思われる。前半に出てくる政五郎の「番町での長丁場の仕事だから」の台詞は一つの大工組だけではなく、大掛かりな幕府の建設工事を意味する。幕府は江戸城の西側の防御を固めるために、大番組と呼ばれる旗本たちを住まわせた。番町（一番町から六番町）はまさに江戸城の西側にあるので、この界限の武家屋敷の建設工事だったのではないかと推測できる。

田中優子（法政大学名誉教授、江戸東京研究センター特任教授）

法政大学社会学部教授、学部長、法政大学総長を経て現職。

専門は江戸時代の文学、美術、生活文化、アジア比較文化。

現代社会についての連載エッセイなどもある。

『江戸の想像力』で芸術選奨文部大臣新人賞

『江戸百夢』で芸術選奨文部科学大臣賞、サントリー学芸賞

その他著書多数。2005年紫綬褒章。